



宝庵由来記

モダニスト建築家山口文象による写し茶室

伊達 美德



MAP



ウェブサイト掲載 URL

<https://sites.google.com/site/dateyg/houan>

宝庵由来記

モダニスト建築家山口文象による写し茶室

はじめに

「北鎌倉 宝庵^{ほうあん}」は、1934年創建の木造数寄屋の茶室建築である。

北鎌倉の浄智寺谷戸の奥にあり、風趣ある露地庭、八畳と四畳の二つの茶室を持つ瀟洒な姿の数寄屋、一畳台目の小間茶室を抱く大胆な造形の茅葺草庵、甘露の自然湧水井戸などが、緑の自然にいだかれている。

文人ジャーナリストの関口泰氏が自邸敷地に建築、設計は山口文象氏であった。1934年の建築家・山口文象といえ、ベルリンのグロピウスの下から帰国して、日本齒科医専病院のモダンデザインで一躍売り出した時期である。その当時のモダニズム建築運動の若手リーダーであった。その山口の純和風しかも「写し」茶室である。

創建より個人の私宅の茶室であったが、2017年に鎌倉古刹の金宝山浄智禅寺の所有となり、「宝庵」と名づけて、お茶会など多彩な文化活動の場として、2018年4月から一般利用に供されることになった。

山口の仕事を追っているわたしは、ウェブサイト「山口文象＋初期RIAアーカイブス」で、「旧関口邸茶席・宝庵」として概要を紹介しているが、これを機会に補足調査をして、その由来などを詳しく記しておくこととした。

「宝庵由来記」と題したのは、建築主の関口泰氏が「吉野窓由来」と題して、この「宝庵」を創建するものになった草庵茶室の由来を建築当時書いているので、それを受けたつもりである。

2018年1月30日

伊達 美徳

目次

- 第1章 北鎌倉に山口文象設計の茶室を訪ねる ● 5
- 第2章 宝庵吉野の由来 ● 11
- 第3章 常安軒の由来 ● 16
- 第4章 宝庵を興し守り伝える人々 ● 21

第1章 北鎌倉に山口文象設計の茶室を訪ねる

1. 北鎌倉の山口文象設計の茶席建築

2017年の秋も深まり初冬になるころ、北鎌倉に紅葉狩りに行ってきた。いや、実は行つてみたら紅葉が美しかった結果なので、真の目的は建築家・山口文象（1902〜78）の和風建築狩りであった。訪ねた先は、山口文象設計で1934年に建った元は関口邸の茶席、今の名は「宝庵」という2棟の茶席である。わたしは1976年に訪ねたことがあり、その時は山口文象について行った。そして今回は建築家の小町和義さんと一緒だった。小町さんは山口の愛弟子であった人で、和風建築の名手として知られる。

1976年に訪ねた目的は、山口文象作品集をつくるために、いくつかの作品の現地を訪ねており、こもそのひとつだった。評伝を執筆する建築評論家の佐々木

宏氏と長谷川堯氏そして建築史家の河東義之氏たちも一緒だった。山口はここを訪ねたのは40年ぶりと話していたから、鎌倉で他にいくつか設計していたのに、完成後はご無沙汰だったらしい。その頃、わたしはこの作品集の編集執筆担当のひとりだったからついてきたのだ。その2年後に山口が急逝したので作品集の出版は遅れて、1983年に『建築家山口文象・人と作品』（RIA建築総合研究所編、相模書房刊）として世に出た。RIAは、山口文象が戦後に創設した都市建築計画設計組織で、今は（株）アール・アイ・エーという。

その作品集の編集作業が終わっても、わたしは山口文象の追っかけを趣味でやっていた。わたしは40歳頃に建築設計から都市計画に転向して、その後は建築を趣味にしてきた。大学での出自が建築史だったから、近代日本建築史



1976年の山口文象氏と宝庵



2017年の小町和義氏と宝庵

における重要人物としての山口文象を追いかけるのは、なかなか良い趣味だとわねながら思うのである。

そうやって山口文象関係の作品資料収集や論考著述などをやってきたが、そろそろ種切れになった。わたしも終活年代にも入ったので、2014年に山口関係の蒐集資料全部をRIAの山口文象資料庫に寄贈してしまった。それで山口文象追っかけを止めていたのだが、ここで偶然の機会に恵まれて、久しぶりに山口建築の茶席を訪問したので、このことを書いておこうと思う。だがその前に、同行した小町和義さんのことを書かねばならない。

2. 小町和義さんの展覧会のこと

小町さんは、1942年に16歳で山口文象の書生となつて弟子入りして、1949年まで戦中戦後通じて山口の下で仕事をした。その後、平松義彦の下で仕事をし、1969年に独立して「番匠設計」を主宰し、寺社や数寄屋建築の名手として知られる。八王子の宮大工棟梁の家に生まれたのに、山口文象に弟子入りして建築家の道を歩んだのは、山口の歩んだ道に似ているともいえる。

今回の北鎌倉宝庵の訪問は、じつは小町和義さんから、行きたいと依頼されたのであった。八王子の小町和義作品展会場で、久しぶりに小町さんに会ったが、卒寿と見えない元氣そのもので、張り切つて解説をしておられた。

小町さんの地元の八王子で、多くの市民や小町さんの弟子たちが、ボランティア活動で展覧会に持ち込んだとて、幸せなお方である。会場にいっぱい模型とパネル、茶室の立て起し模型、そして原寸の組み立て茶室もあって立札抹茶も楽しむようになっていいる。パネルの一枚には、小町さんの師匠であつた二人の建築家、山口文象と平松義彦の大きな顔写真が見える。

あの会場であれば多くの人が来るとは、会場単位面積当たり人数は、同じ頃にやっていた国立ギャラリーでの建築家・安藤忠雄展と比べてよい勝負だろう。建築家って今は人気ある商売なのかと思った。

そして会場で驚くべき嬉しいことを小町さんから聞いた。展覧会のために自宅にある資料を整理していたら、山口文象設計の関口邸茶席（現・宝庵）の図面が出てきたという。その図面は、山口文象の弟の画家山口栄一から、彼の



小町和義氏 小町和義作品展にて

スケッチ帖と共にもらったものとのこと、どちらも山口文象の重要資料だから、R I A の山口文象アーカイブスに入りたい、その前に図面をもつてその茶室を見に行きたいので、今の持ち主に連絡してほしいと頼まれた。面白いことになった。なお、小町さんは1941年から山口の弟子だから、この茶席の設計にはタッチしていない。

以前に訪問したときのこの茶席の主は、鎌倉の建築家・榛沢敏郎氏であったが、今もそうであるかわたしは知らない。そこで知人の鎌倉の建築家福澤健次さんに尋ねて、現在の茶席の主の浄智寺から茶席の運営を受託した「鎌倉古民家バンク」の島津克代子さんにつながった。今回は小町さんと共に島津さんを訪ねて見せていただいた。浄智寺和尚の朝比奈恵温さんもお顔を見せてくださった。

旧関口邸茶席は、1975年と同様に健在だった。この谷戸の庭と建築を愛して、保存修復に手を尽くした榛沢敏郎さんのおかげである。茶席建築の名手の小町さんが、新発見図面を見つつ解説してくださって至福の午後だった。

3. 宝庵と名づけられた旧関口邸茶席の概略

簡単にこの茶席の経緯を書いておくと、1934年に山口文象の設計で建てたのは、ジャーナリストの評論家であった関口泰（1889〜1956）だった。1930年からこの谷戸に住み始めて、朝日新聞論説委員であり、横浜市立大学の初代学長であったひとである。茶室は2棟あり、ひとつは草庵風の茅葺の小間茶室であり、もうひとつは4畳と8畳の2つの茶室を持つ数寄屋建築である。広い茶庭の露地をもつ。

関口の没後はしばらく無人であったようだが、1970年前後だろうか、これを買取り引き継いだのは、北鎌倉に在住の建築家・榛沢敏郎さんであった。長く使われずに荒廃していたが、復元的な設計をして職人を京都から呼び寄せて丁寧な修復した。そして設計アトリエ1棟を増築、茶席と共に仕事の場とした。



宝庵への露地

2017年に榛沢氏は土地を地主である浄智寺に返還し建物も譲渡した。浄智寺はこの茶席を保全して一般公開活用する英断をくだし、「鎌倉古民家バンク」が借家して運営することとなった。同バンクは茶席敷地の南に隣接する「たからの庭」の運営を行っている。

この茶席の名称については、関口氏も榛沢氏も特に名づけたことはないようであり、これまでの建築関係誌などで「旧関口邸茶席・会席」として紹介されてきた。それが今、2018年春から公開するにあたって、所有者と運営者は「**北鎌倉 宝庵**」と新たに名付けたのである。その由来は金宝山浄智禅寺による。

そして2棟の茶室建築の内、大きいほうの数寄屋建築を「**常安軒**」と呼ぶ。その破風に「常安軒」と墨書した板額が掲げられているからだ。東慶寺の井上禅定師の揮毫で、浄智寺住職だった1981年以降に掲げたのだろう。

もうひとつの茅葺草庵の茶室は、「**宝庵吉野**」と名付けられた。この建築が京都の高台寺にある「遺芳庵」の写し茶



常安軒



常安軒の待合



宝庵吉野

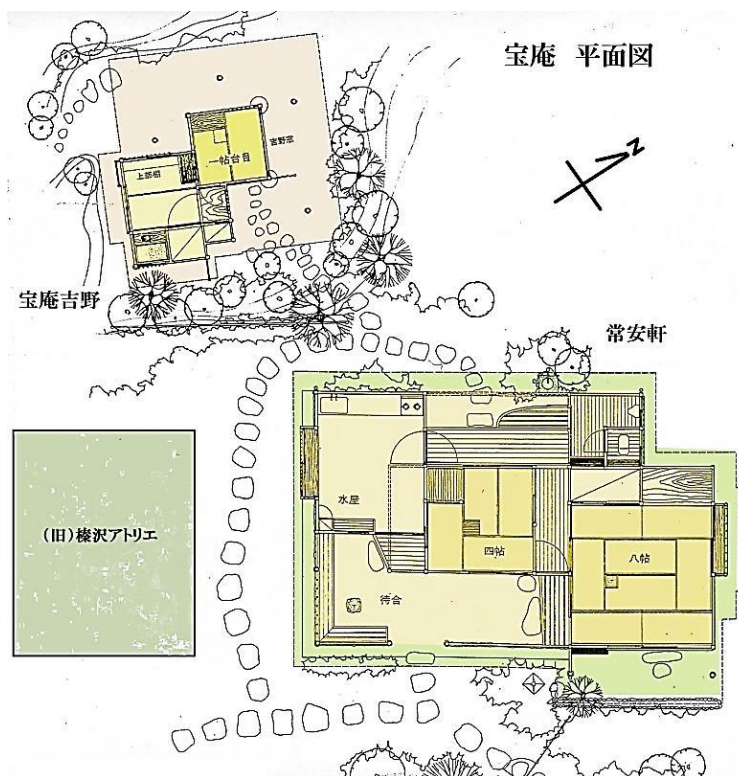
室であり、その茶室には十七世紀京都の名妓吉野太夫ゆかりの伝えがあり、大きな丸い障子窓を吉野窓というからである。

また、榛沢さんのアトリエ棟がある。榛沢さんが建築家として山口文象作品へ敬意を示すように、ひっそりと建つ木造平屋である。これは公開される宝庵の裏方を担うのであろうか。

4. 関口泰が愛でた浄智寺谷戸の風景

宝庵は、鎌倉の谷戸（やと）と呼ばれる三浦半島の典型的な地形の中にある。このあたりから半島特有のデコボコ丘陵ばかりで、海辺に沿ったところの外には平地が少ないので、12世紀ごろの昔に鎌倉幕府ができたころから、人口増加に対応して、丘に切りこむ狭い谷間に宅地をつくってきた。わたしもながらく鎌倉の谷戸に住んでいたから分るが、谷戸は谷の向きや深さによっては、日中のほんの少ししか日が当たらないし、奥の方になれば坂道は急になり更に階段になって、歳とると住みにくいところだ。

浄智寺谷戸は南上りであり、宝庵はその奥にある。緑の丘陵に囲まれていて、南が高く北下りだから陽光が照る時間は少ないが、四季折々の変化を見せる豊かな自然景觀に恵まれている。この茶席をつくった関口泰は谷戸を愛し、短歌「浄智寺谷風景」や随筆「小鳥と花」に自然を描いている。鶯の声で目を覚まし、彼岸桜、紅梅、山桜、染井吉野、大島桜、蟬梅、雪柳、緋桃、芍薬、牡丹、山躑躅、山吹、山藤などの花々を愛でる日常を、優雅な筆にしている。吾子のゐる書齋に近く乙女椿紅梅植ゑし庭師翁は



植込の向ふは茶庭こちらには牡丹植えんと苗を買ひけり

大き巖うしろになしてこの梅はことしれうらんと咲きにけるかも

吉野窓の茶室の前に白萩の花枝長くしだれ咲きたり

むらたけの竹の葉末の雫さへ落さぬほどの朝の風ふく

この谷は雨こそよけれ山百合の花しろじろと浮きて見えける

（関口泰著『空のなごり』より引用）

関口がここに居を構えたのは1930年、41歳だった。多くの評論や随想をここで筆にして世に送り出した。

わたしが家建てた昭和五年頃は、御寺より上にはわたしの家一軒だけで、（中略）私が浄智寺谷を初めてみたのは、昭和五年の二月の末であった。もう此の時は今の道が一本荒野を貫いてゐる姿で、道の両側は枯れた茅萱と草とで足を踏み入れるにも困難であった。（中略）それでその時すぐに約束して三月から借りる事にしたのである。（中略）四月二十六日から建築を初めて七月末には引越してきたのであった。

（関口泰著『金寶山浄智禅寺』後書きより引用）

この家が茶席敷地の北に今もある関口家の母屋だった建物であろう。この5年ほど後には、陶芸家の久松昌子がさらに奥の一段上に窯を築いたが、そこが今の宝庵の南隣にある「たからの庭」である。

関口がその生を閉じたのは1956年春のこと、主のいなくなったこの茶席をしばらくして引き継いで再興したのは榛沢敏郎さんだったが、この建築家もこの谷戸の自然と茶席を愛していたからこそ、今、3代目の主にバトンタッチができるのだ。



浄智寺谷戸の奥にある宝庵

第2章 宝庵吉野の由来

1. 関口泰と遺芳庵そして宝庵

「宝庵」には山口文象設計の茶室は「常安軒」と「宝庵吉野」の2棟あり、さてどちらから話をはじめようかと考えたのだが、建築主の関口は「宝庵吉野」の方から想を起したらしいので、ここでもそこから始める。

関口が居を構えて美しい緑の谷戸を眺めつつ、その風景に奈良の室生寺にある五重塔を建てたいと思い始めた。2年ほどそれを考えていたがとても無理と覺つて諦め、次に思いついたのは京都の高台寺にある茶室の遺芳庵を写して作ることにした。京に旅したとき見て気に入ったのである。この小さな草庵茶室ならば経済的にも可能である。

次で湧き上った空想が吉野窓の建築だ。これは前から吉野窓を知ってゐてあれをここへ建てようと思ったのではなく、義弟の旭谷左右に案内されて京都の茶席を見物してまはつてゐる時に、高台寺の中の佐野画伯の家にある「遺芳」の席を見て、これはいいと思った。無論茶道の方からではなく、私の庭における絵画的効果から話であるが、二坪か三坪の小さい家に比較してトテツもなく大きい三角形の屋根と、伽藍石を踏まへた大きな丸窓は、それだけで絵だ。それに何よりも、一畳大目の茶室と二畳の水屋は、建築費からいっても、宝生寺の五重塔の如く空想に終らずに実現の可能性をもつし、長く茶室につかはれずに暴風雨に壊されたまま蜘蛛の巣だらけの物置のやうに、庭の隅に抛り放しになつてゐる此の可憐なる茶席は、柱や床板の一つひとつに高価な正札のつてあるやうな富豪の茶室とは事変り、私に消極的自信をつけてくれるに十分なものがあつたからだ。

それで洋画家たる旭谷と、ドイツのバウハウスにゐた新建築家の山口蚊象君とに相談して早速建築をはじめたのである。鹿子木門下の洋画家ではあるが、京都に育つて裏千家の茶の素養もあり、六、七十の茶席を廻つて研究して斯道の大家にならんとしつつある旭谷と、分離派の新建築家ではあるが、早く茶室建築に目をつけて、ベルリンで修業してゐる間に私と茶室建築の約束をした山口君であるから、変に型にはまつた茶の宗匠や、高い金をとりつけた茶室建築家と相談するよりは、余程話につきやすいわけである。（関口泰著「吉野窓由来」より引用）

つまり、今の「北鎌倉 宝庵」をつくりはじめるときは、関口泰が「宝庵吉野」の茅葺茶室をつくりたいことからじまつたのだ。それをなんとベルリンで山口に話したという。山口文象がベルリンのグロピウスの下に居たのは1

931年春、932年の6月、関口が朝日新聞のベルリン特派員だったのは1932年4月、11月である。山口の滞欧時に記入していた手帳があるので見ると、1932年2月14日と3月3日に関口の名がある。関口の滞在時期より少し前だが、手紙とか電話連絡のメモだろうか。

関口の話の遺芳庵については、山口文象も関口よりも前にそれを見ていて、素晴らしいデザインだと知っていた。なお、関口の文中に「パウハウスにゐた新建築家山口蚊象君」とあるが、山口はパウハウスに居たことはない。また名前が蚊象となっているのはその頃の自称であり、後に文象と戸籍名も変えた。

ところで、そもそも関口はなぜ茶席を設ける気になったのだろうか。その母方の茶道の家系を追ったエッセイ「宗偏流の家元」(『空のなごり』所収)にこう書いている。

私の祖母が山田宗偏の家から出てゐるので、私の母が一時宗偏流の家元の八世を襲ひ、不審庵十一世宗貞を名乗つてゐたことがあつた。(中略)わたしはここに機会をえて、宗偏の血統が微かながら残つてゐたことを記録し、私個人としては、道安好みの一畳台目どうこの席で、(中略)十一世不審庵宗貞の霊前に茶を奉ろうと思ふのである。

どうやら、血筋のゆえにやむなく宗偏流家元となり、多くの子どもを育てて茶室も道具も持たずにいた母・操への敬愛、思慕そして供養が根底にあつたようだ。

2. 山口文象と宝庵吉野

関口の文中に、山口が「早くに茶室建築に目をつけて」とあるのは次のようなことだ。山口は通信省の製図工であつた頃に、大阪市内の局舎工事現場監理の仕事で1921、22年に大阪に住み、休日にはいつも京都、奈良、堺の茶室を訪ね、建築実測や写真撮影をした。その多数の写真アルバム3冊がある。その中には高台寺の遺芳庵もある。だから関口にベルリンで、鎌倉に遺芳庵を持てきたいと言われたときに、



高台寺遺芳庵

(1922年頃 撮影：山口文象)



宝庵吉野

2017年12月 撮影：伊達美徳

既にそれを知っていたのだ。

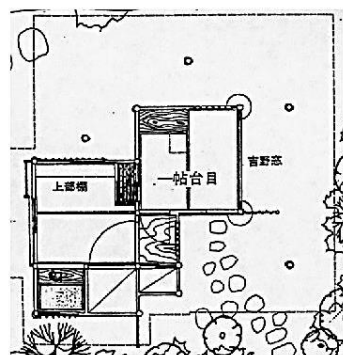
これがすばらしいデザインなんです。屋根のヴォリュームの大きさ、それら全体のプロポーションが実にすばらしい、その話を関口先生にしたら「じゃあ見に行こう」というわけで見に行きました。そこで決まったわけです。

『住宅建築』1977年8月号

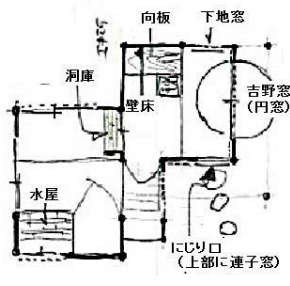
したがって、この茶室は既存の茶室のコピーであり、建築家山口文象のデザインではないが、山口の談には「敷地の条件に合わせて」左右反転したともいう。茶道に暗いわたしにはそれがなぜなのか分らないが、茶庭の構成上でそうなったのだろうか。茶道に通じていた関口あるいは夫人が本勝手を望んだのかもしれない。

「丸窓の位置がなかなか決まらないので、会席のほうもずっと後れまして」ともあるから、宝庵吉野の位置決めが最初であり、それを焦点として茶庭も常安軒も配置を決めたのだろう。そこにはオリジナルデザインがある。

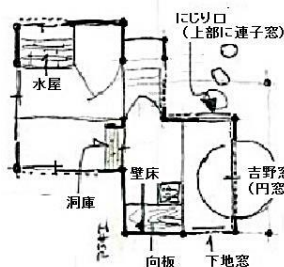
なお、日本では有名な茶室の全部又は一部をコピーして、別のところに建てることを「写し」といって、昔からごく普通に行っていた



宝庵吉野



(左の平面図の上下反転)



京都高台寺 遺芳庵

遺芳庵は逆勝手だが、宝庵吉野は左右反転したので本勝手



高台寺遺芳庵



宝庵吉野の左右反転写真

左は遺芳庵、右は宝庵吉野を左右反転、当然ながらそっくり

習慣があるから、ここでも特に不思議なことではない。後で述べるが「常安軒」にも重要な部分に写しがある。

それにしても、ナチスの暗雲漂う1932年のベルリンで吉野太夫の遺芳庵の話とは、なんとも粋な二人である。その年に山口文象は帰国したが、翌年にブルノ・タウトがナチスを逃れてアメリカ亡命を目指して日本にやってくるし、翌々年には山口の師匠のW・グロピウスがイギリスに逃れてアメリカに亡命する。

そのブルノ・タウトは日本で山口文象と何度か出会っており、この宝庵を褒めているのである。1934年6月に山口文象はその建築作品個展を銀座資生堂ギャラリーで開いたが、観に来たタウトが6月15日の日記に書いている。

建築家山口蚊象氏の作品展覧会を観る（同氏はドイツでグロピウスの許にいたことがある）。作品のうちでは茶室がいちばんすぐれている、——山口氏はここでまさに純粹の日本人に復ったと言っている。その他のものは機能を強調しているにも拘らずいかにも硬い、まるでコルセツトをはめている印象だ。とにかくコルビュジエ模倣は、日本では到底永續するものでない。『日本・タウト日記 1935—1936』篠原英雄訳 岩波書店刊）

タウトが書く「茶室」とは、今の宝庵のことである。ほかにも出世作の日本歯科医学専門学校など8件のモダンデザイン建築を展示したのに、タウトがほめたのはこれだけであった。タウトの評価をどうとるか難しいが、桂離宮を称賛し日光東照宮を貶した鑑識眼でみた関口邸茶席であった。彼が日本で褒めたモダンデザイン建築は、東京駅前にある中央郵便局舎（吉田鉄郎設計）だけだったようだ。タウトはアメリカ亡命に失敗し、トルコで客死した。

3. 大工棟梁山下元靖と宝庵吉野

この茶席常安軒の工事をしたのは、大工棟梁の山下元靖であり、『工匠談』（1969年 相模書房刊）という本を出して、自分のいろいろの仕事を語っているが、その中でこの茶席の想い出も35年も前のこととして語っている。

この本には、山口文象による「山下さん」という序文があり、関口から設計を依頼され、山下と「毎日浄智寺の現場で……けんかをしながら楽しんで仕事に没頭した」と記している。どちらも30歳そこそこの若者だった。

山下はその本の「北鎌倉の関口邸の茶室」の章で、常安軒については何も述べずに、宝庵吉野と離れの仕事についての自慢話ばかりしている。その宝庵吉野の茶室について、草ぶき屋根の小屋組み仕口の仕事を茅葺屋根専門の職人から褒められたこと、吉野窓を貴人口にも使うように工夫したこと、土庇柱の杢石に寺院の向拝の杢石を転用したように古びて見せる工夫をして関口を感心させたことなど、職人肌が面白い。

窓は吉野窓にし、直径を京間の六尺の大丸窓にしました。それは貴人口にも使用する関係で、丸窓の下部を半紙幅の半幅、つまり下から約四寸の高さのところに図のように水平に切り、掃き出しも兼用できるようにしました。『工匠談』

京の遺芳庵の吉野窓は、障子の外に格子があつて出入りできないが、宝庵吉野では出入り可能としたのは、山下の工夫か山口の案か、それとも関口の指示だろうか。

方形屋根のてっぺんにかぶせる陶器の甕について、山下はこう語る。

茶室の屋根は方形で葺き仕舞いの棟には、直径二尺の摺り鉢を使うことにし、わざわざ三州へ注文してのせました。それをみて施主もたいへん喜んでくれました。『工匠談』

ところが関口は、「鎌倉の骨董屋で購つて来た二百年前のすり鉢の朱色もよく映つて来た」（「吉野窓由来」）と書いているから、どちらが正しいのだろうか。現在の宝庵吉野の屋根頂点に乗る甕について、山口文象が言っている。

丸窓のほうの屋根に瓶がのっかっています。いまのやつはわたしがのせたのとはちがうんです。もつと大きかった。あれはいまあの茶席の足元にころがつている摺り鉢なんです。プロポーションからいって、いまのは小さい。（住宅建築 1977）

先日の見学の時に床下を覗き込んだら、大きな鉢がひとつ転がつていたから、これが元の播鉢かもしれない。破損して取り替えたのだろうか、それは榛沢敏郎さんに聞かないと分らない。

宝庵吉野は茅葺である。その屋根と障子窓の大きな三角形と円形とが対になっている大胆な造形である。床面積は3坪弱なのに、屋根投影面積は8坪余り、そのうち茅葺土庇が6坪もある。丸窓のある正面から見ると、間口は1間幅なのに、屋根の軒先幅がその3倍もあり、それが四角錐をつくる。巨大丸窓はでっかち頭に対抗するためか。

今どきは茅葺屋根の維持が、なかなか難しそうである。現状を見ると、さしあたつて挿し茅による修復が必要なようだ。棟梁の山下もこれを建てる時に、「その頃、草ぶき屋根の葺ける専門の屋根職人は、北鎌倉の辺には六〇歳になる老人が一人しか残っていませんでした」（『工匠談』）と語っているが、現代はどうなのだろうか。北鎌倉には、浄智寺の書院と茶室、明月院の開山堂、東慶寺の山門と鐘楼、円覚寺の選佛場、長寿寺山門と観音堂など寺院に茅葺屋根が多いし、いくつかの茅葺民家もあるから、それらの維持修理の茅葺職人が今もいるのであろう。

第3章 常安軒の由来

1. 常安軒のデザイン

宝庵にアプローチするには、浄智寺谷戸の中を貫く道を奥に向かうと、右手に草屋根の風雅な門が迎えてくれる。その門をくぐりゆったりと左カーブする露地を歩めば、最初に出会ったのがこの数寄屋建築の常安軒である。先に紹介した宝庵吉野は、その裏にある。宝庵の表顔は常安軒なのに話を宝庵吉野から始めたのは、関口の茶席発想がそこから始まったのに従ったことは前述した。

宝庵吉野が小面積なのに大きな高い屋根を載せてボリュームを大きく見せているのに対して、常安軒はその大柄をできるだけ小さく低く見せようとしている。屋根を小瓦一文字葺き柿（こけら）葺き（いまは金属板葺き）の奴（やつこ）葺きで薄く軽く見せる。しかし、それはヨーロッパ帰りの洋風モダニスト建築家として売り出したその頃の山口文象の作品としては、真反対ともいえる正統派和風数寄屋造りである。山口が洗礼を受けたモダニズム建築は、できる限り技巧を見せないように、シンプルでプロポーション美しくデザインする。「豆腐に目鼻」と言われたほどの愛想なしである。いっぽう、数寄屋建築は技巧の満艦飾である。だが、数寄屋建築にも精通するモダニスト山口文象は、さすがに数寄屋の技巧を尽くしながらも、できるだけシンプルに納めてプロポーションを追及する。

常安軒のデザインについて山口文象は語る『住宅建築』1977。

しかし考えてみると、当時はずいぶんと細かい仕事をしましたね。瓦の寸法なんかも全部普通の寸法とちがう。あの数寄屋建築の瓦ですよ。あれは全部特別に焼いたものなんです。大きさとか全体のプロポーションからいって、普通の瓦ではない。プロポーションから瓦一枚一枚の寸法を出しました。



左が常安軒、右が宝庵吉野

たしかに、山口文象はモダンでも和風でもプロポーション・デザインの人であり、特に和風はその大工棟梁の家系という出自からして身に付いた技能であった。常安軒は数寄屋にしてはどこかスマートである。

2. 常安軒も写し茶室か

関口が常安軒と宝庵吉野の二つの茶室建築を対にして配置したのは、高台寺の「遺芳庵」が「鬼瓦の席」と対になっていることに寄っているようだ。関口は常安軒の四畳茶室を書斎にしていたらしい。

吉野窓の号は即ちこの吉野太夫が、佐

野紹益の室となつてから、風流な家庭生

活を送つたと伝へられる茶室なのであつて、今やはり高台寺にある鬼瓦の席は紹益の茶室で、付書院の障子をあけると、斜に吉野窓が見えるやうな配置に作られてゐたものだ。この窓と窓とを向ひあひに二人が顔を見合せてゐたものでもなからうが、吉野窓は明眸の佳人を偲ぶにふさはしい、よい意味で女性的な美しい建築だといふことはいへる。(中略)

私が今筆を執つてゐる書斎からも頭を少し前に出すと左に吉野窓が見えてゐる。萱の屋根の色も古び、鎌倉の骨董屋で購つて来た二百年前のすり鉢の朱色もよく映つて来た。まだすっかり暮れ切らない薄暮、まだ萱屋根の形がほのかに見える頃に燈を入れると、一間四方の壁に直径五尺二寸の丸窓が白い障子の棧を薄墨に見せて、大きな雪洞のやうに浮くのは何ともいへず美しい。丸窓を八寸開いて、吉野太夫のやうな白い顔がのぞけばといふ妄念も起るが、……。(「吉野窓由来」より)

遺芳庵と鬼瓦の席との関係を、常安軒と宝庵吉野の関係にとり入れたのなら、それもまた写し茶室の技法であると



宝庵吉野の丸窓前から常安軒を見る



常安軒 四畳茶室から庭を見る

も言えるだろう。この二つの茶室のとりあい角度が、直角から微妙に開いているのは、互いにその角度で見ると、妄念が湧くほど美しく見えるからだろうか。そのあたりで建築主関口と設計者山口とが、あれこれと思案し妄想を働かせるものだから、この配置が決まらなく「会席の方もずつと」工事着手が後れたのだろう。

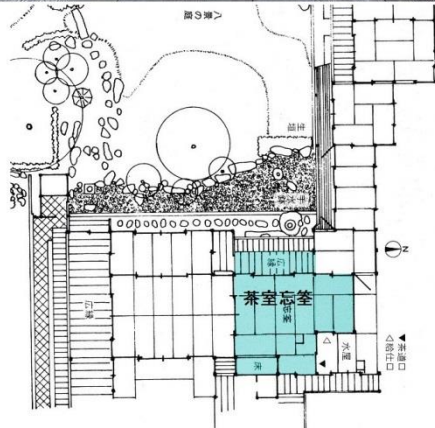
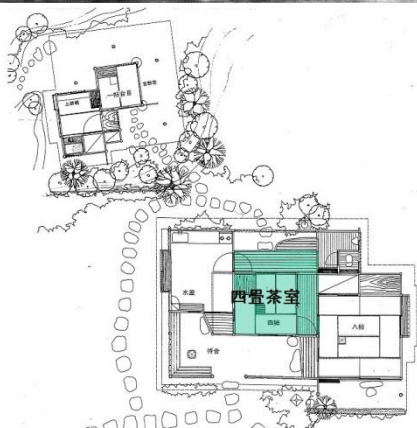
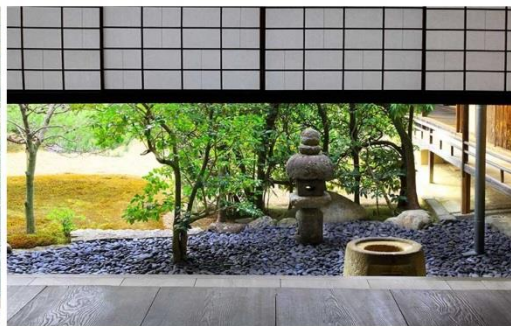
山口は「数寄屋造りの方ね、これは創作でね、あまりマネはないはずですね」『住宅建築』という宝庵吉野が写しであるのに対して、常安軒はオリジナルだと言う。だが、そうだろうか。常安軒の中心にある四畳茶室から、広縁を通して見る西の庭の景色は、この建物での一番の見せどころであるが、それを観て「アレッ、これは忘筌写しだ」と思う人は多くいるだろう。京都の大徳寺孤篷庵の茶室忘筌（ぼうせん）である。

忘筌と宝庵吉野それぞれの茶室の庭の眺めと平面とを比べてみよう。茶室そのものは、忘筌は書院風で12畳と広く、こちらの常安軒の数寄屋風4畳とはかなり異なるが、庭の眺めはどちらもその西側に開く間口2間の広縁と落縁があり、右に蹲踞を配し、そのむこうに吊り障子で上半部を見切っている。やはりここは「写し」と言わざるを得ないだろう。

北鎌倉関口邸茶席数寄屋会席 四畳茶室から庭を見る



京都大徳寺孤篷庵 茶室忘筌から庭を見る



たぶん、この写しも吉野窓茶室と同様に関口の要望であり、「書斎からも頭を少し前に出すと左に吉野窓が見え」るようにしたのだろう。どちらも風雅な眺めだが、鎌倉の方がゴタゴタせずに野趣に富み美しい。もともと、創建時の姿は分からない。それにしても鎌倉に居ながらにして忘筌から吉野窓を眺めようなんて、両方の良いところり組合せの写しだからこそできる欲張り技である。どおりで山口の「あまり……はず」と、どこか躊躇する口ぶりである。ただし、山口が20歳ころに京都で訪ねまわった茶室写真帳の中に忘筌はない。

いずれにしても、宝庵は建築主の関口の意図がおおいに入っており、いわば関口と山口の共同設計のように、わたしは思うのである。

3. 宝庵の設計図

山口蚊象建築事務所時代につくった宝庵、つまり関口邸茶席の設計図は、青焼き図面8枚しか現存していない。吉野窓茶室は東立面図、断面図、室内断面展開詳細図の3枚、数寄屋会席は8畳座敷断面展開詳細図と4畳茶室断面詳細図の2枚、そして離れが2枚で、いずれも平面図が無い。

これらは山口の弟子だった小町和義さんが、山口栄一（山口文象の実弟）から託されていたのをつい最近見つけ出した。これらの図面を書いたのは山口文象かもしれないが、筆跡が違う気もする。河裾逸見（山口蚊象建築事務所の最初の所員）か山口栄一かもしれない。

大工棟梁の山下元靖は工事について『工匠談』にこう書いている。

昭和八年から昭和十年にかけて約二方年間、北鎌倉の浄智寺という寺の奥にある関口邸の工事を頼まれて、毎日横浜から通うようになりました。その工事は本館のほかに、茶室と数寄屋造りの会席、それに同じ邸内の親戚の住宅二棟、つごう四棟の新築と、その他に本館の増改築があったわけです。設計は山口文象建築事務所です。

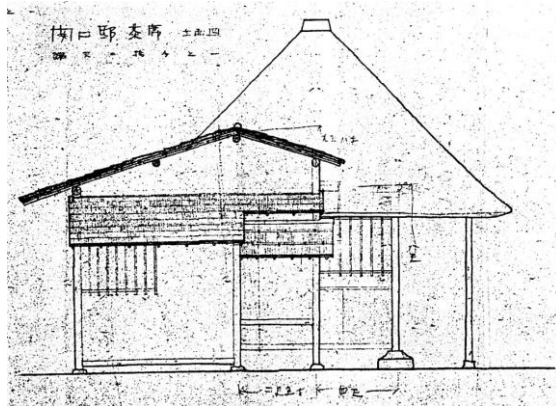
その仕事のオーナーであった関口泰は、1930年に自邸を建てて引っ越してきたと自著に書いているから、山下が本館という関口自邸そのものは山下の工事ではなかったのだろう。その関口自邸は、この茶席の敷地の北に隣接して現存する。その本館の増改築とは、本館の南の広い池のほとりに、渡り廊下でつないだ3坪ほどの「離れ」増築であつたらしい。

それは昔の高殿のようなもので、用途は主人が毎朝ここで謡曲の練習をするためのものでした。構造としては、四本の丸柱を使用し、そのうちの二本は池の中に据えた玉石の上に建てることにし、できるだけ風雅な感じを出すことに努めました。

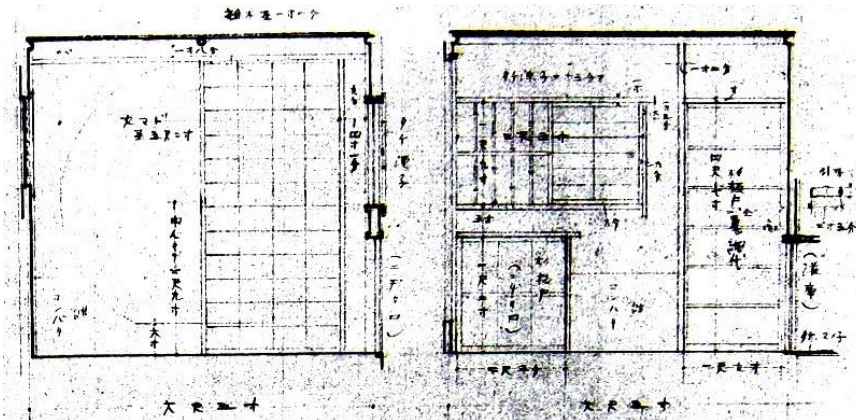
『工匠談』

そして四方に壁や建具はなくて手すりだけの吹きさらし、床は板張り、天井は漆喰塗りで中央へ周りからムクリがあり、下で手を叩くと日光の鳴き龍現象が起きたと自慢話を書いている。現在はこの離れはないが、小さな池はある。しかし、「離れ」のタイトルの設計図面2枚を見ると、山下が書いた姿とは全く違う図であるから現場で設計変更があったのだろう。山下が離れを含めて5棟を工事したとすれば、そのうちの親戚住宅2棟と鳴き龍天井離れの図面が

一切残っていないし、それらについて山口文象が1976年にここに来た時もその後もまったく言及しなかったから、推測すれば、現存茶席2棟のほかは山下棟梁の設計施工の可能性が高い。



宝庵吉野の設計図面 山口文象建築事務所制作



宝庵吉野の設計図 吉野窓と踊り口部分

第4章 宝庵を興し守り伝える人々

1. 宝庵を興した関口泰氏

この茶席をつくった関口泰（せきぐち たい 1889～1956）は、朝日新聞論説委員だったジャーナリストであり、評論家として政治や教育論の著作を多く世に問い、加えて旅と山歩きを趣味として随筆や短歌俳句もよくした。

著作の公刊書も36冊と多く、『民衆の立場より見たる憲法論』（1921年）から始まり、『軍備なき誇り』（1955年）が最後であった。没後に関口を惜しむ人々や近親者が編集刊行した『関口泰文集』（1958年）と『関口泰遺歌文集 空のなごり』（1960年）に、主な著作が収録されてその足跡がよく分る。

この浄智寺谷戸を愛した関口は、『金寶山浄智禅寺』（1941年）なる深い歴史考証の著作を出版した。その「後書」に、関口が浄智寺谷戸に居を構えた1930年頃の風景や人物の状況を細かに記している。それらを瞥見して関口のことを記す。

静岡市に生まれ、東京帝大法科大学を卒業、1914年から19年まで国家公務員、そのあと朝日新聞に入社して論説委員、1939年に退社し、評論家として活躍することになる。リベラルな立ち位置で政治や教育の評論をよくし、政府や自治体の委員なども務める。1950年に初代の横浜市立大学学長となった。

1930年に北鎌倉の浄智寺谷戸に自邸をつくり、34～5年に自邸の南に今の宝庵の2棟や離れ、親戚の家などを建てた。赤城山に別荘を構えて、鎌倉と赤城から数多くの評論と随想を世に出し、浄智寺谷戸で67年の生涯を閉じた。

関口の数多くの著述の内、すでにこれまでも引用してきた「吉野窓由来」は、「宝庵」についての紹介文ともいう随想で、『山湖随筆』（1940年）と『空のなごり』に収録されている。ここに関口が山口とベルリンで、吉野窓茶室の話をしたことが書かれてい



建設当初の茶室と庭



関口 泰氏

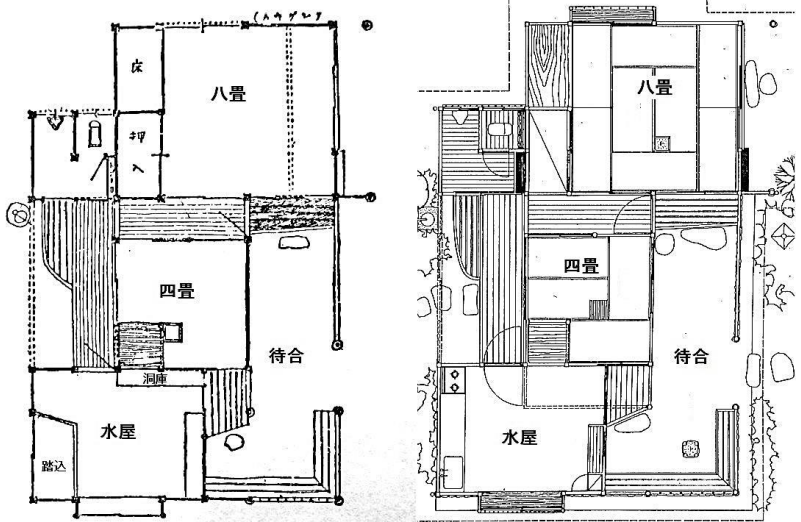
るが、そのとき二人は既に知遇であったと山口文象は語っている。山口が関東大震災直後からの建築運動を通じて、多くの美術家や文化人たちと交流を持ったので、その頃であろう。関口の文章は、「やわらかく話すように出来ていて、それが論理の糸で長くつないであり、長い文章だがそれが分りよく、分りよい文章に得て欠けている高い気品があった」(『空のなごり』の序文)と、朝日新聞社で論説委員の同僚だった笠信太郎が書いている。

そこで、関口の単行本をせめて1冊は読もうと、わたしが選んだのが関口最後の著書『軍備なき誇り』である。これが出た1955年といえば、敗戦10年目、日本では逆コース、再軍備、ビキニ水爆実験、原子力兵器、憲法改正、吉田長期政権などが言われる。国際情勢は朝鮮戦争が休戦になったばかり、東西緊張が高まる中で、ベトナムあたりがきな臭い。読んでいて、日本と国際情勢の諸課題も複雑さは現代になっても不幸にしてよくなっていないのであり、人名と国名を入れ替えると今に通じる有様で、関口の論調が今の朝日新聞調であるのが、なんともはや興味深かった。

2. 宝庵を設計した山口文象氏

建築家山口文象(やまぐち ぶんぞう 1902〜78 戸籍名)

は瀧蔵だが蚊象と自称、40歳から文象、55歳で戸籍も文象)は、大工棟梁の次男として東京浅草に生まれた。職工徒弟学校を卒業して清水組に入って工場やビルの仕事現場にいたが、建築家をこころざして通信省営繕課に移り製図工となった。そこで才能をぐんぐん現して、上司の建築家たちに認められる。



常安軒平面 左は建築当初、右は現在
比較すると、当初は水屋の左に引違戸で出入りの踏込み。
四畳茶室の炉の位置が異なり、水屋との間に洞庫。八畳茶室に出窓がない、

関東大震災の直後から、内務省復興局と日本電力で橋梁やダムデザインのデザイナーにもかわった。仲間の若い建築家の卵たちを糾合して「創宇社建築会」を結成し、建築運動のリーダーとして建築界で名が知られた存在となり、多くの美術家や文化人との交友を得る。1927年から建築家石本喜久治のもとで、朝日新聞社屋や白木屋百貨店等の設計にたずさわった。

1930年に幸運な機会を得てシベリヤ鉄道でヨーロッパ遊学の旅に出て、ベルリンで建築家グロピウスに師事し、各地を回って船便で1932年に帰国した。

1934年に出世作となる日本齒科医学専門学校附属病院を発表して一躍スター建築家となる。1936年には「黒部川第2発電所・小屋ノ平ダム」を発表して、土木と建築の両方の才がある建築家として確固たる地位を築いた。

しかし、戦争がその行く手を阻み、10年ほど事実上の逼塞の後、1952年から共同設計集団RIA (Research Institute of Architecture)を率いて戦後の再出発をした。それは現在の(株)アール・アイ・エーとして都市建築コンサルタント組織に成長し、これが山口の戦後における最大の作品と言ってよいだろう。

戦後は何度も大病入院して、組織の長としてはつとめたが、自分で設計する活躍を多くはできなかった。いくつかの珠玉作品のひとつに晩年になって、あの関口邸吉野窓茶室を拡大したような大屋根の寺院「是の字寺海龍院本堂」の設計をしている。ただし、それは木造ではなくてコンクリと鉄であり、丸窓はない。

関口が「ドイツのバウハウスにゐた新建築家の山口蚊象君とに相談して早速建築をはじめたのである」(『吉野窓由来』ただし山口はバウハウスで学んでいない)と書いているが、茶席が実現した1934年の頃の山口文象は、「洋行帰り」の「国際様式」に通曉した、モダニズムデザインの流行建築家への道を勢いよく登り始めていた。そのモダン建築家が、なぜ純和風の数寄屋建築の設計をできるのか。茶席の設計を関口から依頼された時のことをこう語っている。

……茶席もつくりたいというわけですね。「文ちゃんどうだい、茶席もできるかいな」、「いやあ、やってますよ、まっ白い建物ばかりじゃなくて日本建築もやってます、茶席できます」「そう、じゃひとつ頼もうかなあ」……
∴。『住宅建築』1977

関口も山口文象の仕事ぶりを知っていて危惧したのだ。だが山口文象は和風には自信満々だ。茶室は京都の現物で研究している。

谷口吉郎や吉田五十八の茶席なんか、わたしは茶席だと思っていませんね。あれは学問的に、非常に厳しい割

り出し方からきていて、それが基礎になって先生の茶席になっている。わたしのはそれとはちがう。わたしの親父が木工で、茶席も手がけていましたから、親父の後をついて歩いたりして、ごく自然に感覚的というか触覚的というか、身体で覚えたところがあつたと思いますね。とくにプロポジションね。ぼくのは、だから感覚から入って行つた茶席だと言えるでしょうね。『住宅建築』1977)

机上で学んだ大学出の有名建築家よりも、大工棟梁家

の出自として身体にしみ込んだ才能があるのだと、いかにも自信に満ち満ちた言葉である。流行最先端のモダンズムで売り出した山口だが、実は住宅は和風伝統風も洋風モダン風も設計をした。山口が戦前に設計した住宅建築で、洋風モダン住宅は今では一軒も残っていないが、和風住宅は、この宝庵のほかに2軒が現存する。

新宿区にある小説家の「林芙美子邸」(1940年、現・区立林芙美子記念館)は、数寄屋と民家風をつき交ぜて一部に洋風もある巧みなデザインである。その書斎の北庭に向つて、宝庵の常安軒にある忘筌写しが左右反転して登場する。宝庵と同じように復元修復されて創建時の姿を保っている。

大田区にある「山口文象自邸」(1940年)はモダンなプランで、和風ではあるが木太い北陸民家風であり、数寄屋とは全く異なる。今は原形を若干は保ちつつもかなり改変されているが、実はその改変過程が面白い。

山口文象は関口邸のころから一気に多作となつて話題作を発表し、鎌倉にも関口邸のほかに彼の作品があつた。中でも北鎌倉に建つた「山田智三郎邸」(1935年)は、



林芙美子邸 1940年



山口文象



左は山田智三郎邸 1935年、右は前田青邨邸 1936年 いずれも北鎌倉

時代の典型的な最先端モダンデザインであった。北鎌倉にはもうひとつ山口の和風作品「前田青邨邸アトリエ」（1936年）があり、これは現存すると仄聞したことがあるが、どうなのだろうか。山口が石本喜久治のもとで仕事していた頃の1929年に担当した、「朝日新聞社社員クラブ」が鎌倉の由比ヶ浜近くに建っていた。1925年頃には数寄屋橋際に建った朝日新聞社屋の設計に携わっているから、そこで当時は論説委員の関口に出会っただろうか。

3. 宝庵を工事した大工棟梁山下元靖氏

旧関口邸茶席だった今の「宝庵」と、その北に隣接する旧関口邸の工事をしたのは、大工棟梁の山下元靖（1896〜？ やました もとやす）であった。山下の『工匠談』（1969年相模書房）によれば、1896年に伊豆下田に生まれて14歳で下田の町棟梁の親方に弟子入りして修業し、その間に藏前高等工業夜間部で学び、1921年に独立して大工棟梁となり、横浜で町場の大工として仕事をした。本格的な数寄屋造りに取組んだのは、1931年から2年ほどの東京深川の鰻料理の「大黒屋」の工事だった。その設計者は石本喜久治で、これを機に建築家たちの仕事をするようになり、また数寄屋建築の研究をしてその方面の仕事を得意とする。山口文象は石本事務所で1930年まで日本橋の白木屋百貨店設計をしていたが、「山口氏と私とは、昭和五年以来交流のある間柄でありましたが、『工匠談』とあるから、山下と出会っていたのだろうか。戦中と直後は横須賀で軍関係の仕事、1950年から町棟梁として再出発、主に逗子鎌倉方面で仕事をし、全日本建築士会理事や神奈川県建築審査会の委員などを務めた。

『工匠談』には多くの木造住宅の仕事を語り、大工技法の秘訣などを書いている。その中に「北鎌倉の関口邸の茶室」の章があり、そこでの職人技を語り、今の宝庵のほかにも3棟を建てたとあるが、宝庵の2棟は山口文象設計だが他は山下の設計施工であろう。1935年の関口邸竣工のときをこう語る。

長い工事各職方の努力の結果、無事に落成したので、祝賀の園遊会が催されました。その日の来賓はいずれも一流の名士ばかりで、邸内には甘酒やしるこ、それにおでんやすしなどのいろいろの模擬店が設けられ、なかなか盛大なものでした。そして私たち各職方も手伝いに招かれましたが、私どもは餅つきを頼まれたので、私が得意のコネドリをして、大工連中で景気よくついたものです。私の長い大工生活のうちで、こんな盛大な落成祝賀会は初めてのことでありました。

4. 宝庵を再興した建築家榛沢敏郎氏

関口没後からしばらくして（1970年前後か）、北鎌倉に住む建築家の榛沢敏郎さんが宝庵を買い取って受け継いだ。主を失い荒廃していた建物や庭を、京都から職人たちを呼び寄せて、復元的設計で丁寧な修復をほどこして、茶席を再興した。

そして谷戸と建物を愛でつつ、アトリエとして建築の想を練り図面を画いて過ごされてきたようだ。関口邸茶席が今の宝庵として、創建時とほぼ同じ姿かたちで今に伝えられているのは、ひとえに榛沢さんのお陰である。今、榛沢さんの設計になるそのアトリエの和風建築が、二つの茶席を見守るように建っている。

ここでのわたしの記述テーマは山口文象の関わりかたを探ることにあり、したがって現在のこれらの建築そのものについてはほとんど触れていない。それはその能力がわたしにないこともあるのだが、今のこの建築を語るべき人は榛沢敏郎さんをおいて他にはいないはずだからである。敬服するこの建築家の話を聞きたい。

地域に根差したこの建築家の作品は鎌倉の各所にあり、浄智寺谷戸に宝庵を訪ねるために北鎌倉駅前の広場に降りると左右に榛沢建築が迎えてくれる。

2017年に榛沢さんはここを去り、土地建物とも浄智寺に戻され替わった。

5. 宝庵を受け継ぎ保ち伝える人々

この谷戸はすべて浄智寺の土地である。この茶席の新たな主となった浄智寺住職の朝比奈恵温さんは、この茶席を高く評価して、朽ちあるいは転ずるのを惜しんで、その英断で保全活用公開へと舵を切った。この茶席への評価と展望をうかがいたいものだ。設計図を発見した建築家の小町和義さんにも、山口文象の戦中戦後の弟子として、また茶室建築の名手として、現地でゆつくりと話を聞きたいものだ。

「宝庵」としての新たな展開は、南隣の「たからの庭」を運営する「鎌倉古民家バンク」が茶席を借り受けて運営を担うことになった。大勢のボランティアたちが、2018年春の公開に向けて整備に取り組む。茶席の新たな歴史が始まった。美しい浄智寺谷戸には、これを興し、継ぎ、伝える素晴らしい人々がいるのだ。



左:宝庵吉野、中:常安軒、右:(元)榛沢氏アトリエ、

◆宝庵略年表

- 1925年頃か 関口泰と山口文象が知り合う
- 1930年 浄智寺谷戸に関口が自宅を新築
- 1932年 ベルリンで関口と山口が茶席建築の相談
- 1934年 関口邸敷地内に茶席2棟（現…宝庵）竣工、翌年に自宅離れと親戚の家が竣工し茶席と合せて落成祝賀会
- 1935年 雑誌『住宅』4月に「関口邸の茶席」掲載
- 1940年 『山湖随筆』（関口泰著）に「吉野窓由来」掲載
- 1956年 関口泰没
- 1969年 『工匠談』（山下元靖著）に「北鎌倉浄智寺の茶室」掲載
- 1970年頃か 北鎌倉在住の建築家・榛沢敏郎氏が取得して復元修理。榛沢アトリエ棟を増築
- 1977年 雑誌『住宅建築』8月号に「旧関口邸茶室一畳台目及び数寄屋造り会席」掲載
- 1981年以降 「常安軒」の額がかかる（当時の浄智寺住職・井上禪定師の揮毫）
- 1982年 『建築家 山口文象 人と作品』に「旧関口邸茶席・会席」掲載
- 1984年 『現代和風建築集4・現代の精華1』に「旧関口邸茶席・会席」掲載
- 2017年8月 浄智寺所有となる
- 2018年4月 鎌倉古民家バンク運営「北鎌倉 宝庵」としてオープン

◆宝庵に関する資料

- ・「関口氏邸の茶席」（雑誌『住宅』20巻4号 1935年4月号）
- ・「吉野窓由来」（『山湖随筆』関口泰著 1940年 那珂書店刊）
- ・「北鎌倉浄智寺の茶席」（『工匠談』山下元靖著 1969年 相模書房刊）
- ・「旧関口邸茶室一畳台目及び数寄屋造り会席」（雑誌『住宅建築』1977年8月号）
- ・「関口邸茶席・会席」（『建築家 山口文象 人と作品』R1A編 1982年 相模書房刊）
- ・「常安軒」（『現代和風建築集4・現代の精華1』1984年 講談社）
- ・関口邸茶席設計図（山口蚊象建築事務所作成、小町和義氏所蔵、A2版青焼8枚）
- ・ウェブサイト「山口文象＋初期R1Aアーカイブス」<https://sites.google.com/site/date/g/bunzo-archives-1>
- ・ウェブページ「1934 北鎌倉の茶席・宝庵（旧関口邸茶席）」<https://sites.google.com/site/date/g/bunzo-archives-1/1934sekiyuchi-tei>
- ・ウェブページ「宝庵由来記」モダニスト建築家山口文象による写し茶室 <https://sites.google.com/site/date/g/houan>
- ・ウェブサイト「宝庵 北鎌倉」<https://www.houan1934.com/>



まちもり叢書 別冊(私家版 非売品)

宝庵由来記

モダニスト建築家山口文象による写し茶室

2018年1月31日 著述

著述・装幀・印刷・製本・発行
伊達美徳

問合せ先 伊達美徳(DATE,Y)
dateyg@gmail.com 090-5802-3384
